

# 勝負するということ。

2008年4月29日。昨年から「みどりの日」から「昭和の日」となった祝日である。広島広域運動公園陸上競技場（通称ビッグアーチ）で、春季サーキットとして織田記念陸上競技大会が開催された。この大会の100mHに出場したのは走り幅跳びの日本記録（6m86）保持者の池田久美子選手。実は池田はハードルでも非凡な才能があり、この大会ではハードルでの日本記録を狙っていた。11時35分から予選2組3レーンに池田が登場。大歓声を浴びてスタートした池田に突如アクシデントが襲ったのは8台目。リード足がハードルにぶつかって膝から転倒。すぐに池田は隣のレーンに入らないように身をかがめた。隣のレーンに入り走者を妨害すると失格になるし、何よりも接触することにより大怪我する恐れがあるからだ。他の走者が通過してから、膝からすねにかけて血を流し、足をひきずりながらゴールする池田。苦笑まじりに、「（ハードルのインターバルが）短かった…。」とつぶやくと、他の選手も同意したために、正式に審判長に抗議。何と7台目と8台目のハードルのセッティングミスが判明。通常、ハードルのインターバルは8.5m間隔であるが、7台目までが48cm長く、8台目までが48cm短かったのだ。主催者側は陳謝し、ハードルのタイム決勝再レースを提案し、池田は同意した。

オリンピック出場を狙う池田選手にとって、大事な試合が続く日程である。5月3日の静岡国際、10日の国際グランプリでは本職の走り幅跳びに出場予定である。大事故につながる運営ミスがあったことに、記者から「怒りはないか。」と聞かれると、「怒るだけエネルギーが無駄ですから」と受け流した。いかに、タイム決勝再レースで自分の力を発揮するか集中しているのである。まずは左足の傷の消毒、打撲した足にアイシングをほどこし、テーピングを入念に施し、ウォームアップに集中したのである。タイム決勝では13秒36の記録で池田が優勝した。

条件が満たされないと、すぐに不平・不満を漏らす選手がいる。あるいは、自分の不利な条件を指折り数えながら、無意識のうちに自分を追いこめないで妥協してしまう選手もいる。勝負するということは、結局もうひとりの自分と勝負することなのだと思う。どんな状況であれ、今自分の持っている力を最大限に発揮することに全力を注げる選手は強いのだ。

オリンピックを目指す池田選手の話であると、簡単に済ませてはいけない。同じ陸上競技で勝負する人間として、この境地を追い求めていきたい。毎週のように公認の競技場で、公認の審判に囲まれて勝負できる、今の恵まれすぎている環境をとことん生かすべきである。